

「はあ〜い、みなさん、いいですか。きょうも『さんすう』のおべんきょうをしましょう。」
「は〜い!」「きのうは〈たしざん〉をやりましたね。」「は〜い!」「では、ふくしゅうしてみ
ましょう。1たす1はいくつですか?」「はい!」「ハイ!」「は〜い!」「では、みんなでいっ
てみましょう。」「2で〜す!」。小学1年生の教室から聞こえてくる子どもたちの元気な声。気
持ちいい響きですね。先生は、たいへんでしょうけど …。

「 $1+1=2$ 」 — ですよ。どう考えたって、答は「2」以外ありません。わたしの友だちに
おもしろいやつがいて、小学5年生にもかかわらず「あのさあ、1たす1は2とは、限んねえよな!」
と言った友だちがいました。「だってよォ、丸い粘土一つに、もう一つの丸い粘土くっつけば、
1個になるだんべな。だから1たす1は1のときもあるだろ!」。「なるほど! こいつ、おもし
れえこと言うなあ …」と感心したことがありました。

きょうから「 $1+1=1$ 」どころか、「 $1+1+1=1$ 」というお話をしようと思います。

☞ 「 $1+1+1=1$ 」なんです … !!? 『三位一体論』とは (1)

キリスト教について話を聞いたひとが、まず「う〜ん…」と考え込み、「なに、それ?」と呆
れ顔をしたり、拒絶反応を起こすことがらうかあると思います。これまでご説明してきた「奇
跡物語」、「復活」、「聖霊」などもそうでしょう。そして今回お話する「三位一体論」となれば、
「ますます頭がこんがらかっちゃうよ …」なんて言われてしまいそうです。

確かにそうかもしれません。佐藤 優^{まさる}氏(作家。同志社大学大学院神学研究科修了。『国家の罫 — 外務省の
ラスプーチンと呼ばれて』その他著書多数)によれば、この「三一論」(同志社大学神学部ではこう呼ぶのだそ
うです)は『神論の難問中の難問である』といひます。

まず、「三」とは何かというと、「父」なる神、「子」なるイエス・キリスト、そして「神の
息吹」である聖霊です。その三つが「一つ」である — という教義が「三位一体論」といわれるも
のです。

「三位一体」と日本語で訳されている言葉は、ギリシャ語は^{トリアス}Trias、ラテン語は^{トリニクス}Trinitas、英語
は^{トリニティ}trinity、ドイツ語では^{トリニテート}Trinität になります。私たちにとっていちばん身近な英語を取りあげ
ると、「trinity」とは、「trin」=「三(要素のある)」と「-ity」=「一(つの状態)」の合成語で
す。そのまま訳せば、「三一」になります。ほかの言語も同じです。

本質において唯一の「神」が、父と子と聖霊の三つの「存在様式」(位格=ペルソナ(persona)、
ラテン語)をもつ — ということです。まず、「三位一体論」が議論される前にどのような歴史的
経緯があったのかをみていきましょう。

「先在のキリスト(メシア・救世主)」とは

イエスが「復活」したという話は第41回~49回でお話ししました。原始キリスト教団の人々の
間では、イエスを「神の子」と見なし、自分のいのちを捧げて人間の罪を贖^{あがな}った「救い主」であ
り、再臨して最後の審判を行う — という信仰が確立していました。さらに、イエスを単に神の子
ではなく、「人となった神そのもの」という見方も使徒パウロの時代(50年代)までに現れていま
した。

『キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、^{しもべ}僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。』(『フィリピの信徒への手紙』2章6～8節)

この『フィリピ…』においては、キリストが「人間イエス」になる前に、すでに神的存在として天にあったことが前提にされています。これを神学では〈先在のキリスト〉と呼んでいます。

ほかにも『コロサイの信徒への手紙』1章に、『^{みこ}15 御子(イエス)は、見えない神の姿であり、すべてのものが造られる前に生まれた方です。^{みこ}16 天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、王座も主権も、支配も権威も、万物は御子において造られたからです。つまり、万物は御子によって、御子のために造られました。^{みこ}17 御子はすべてのものよりも先におられ、すべてのものは、御子によって支えられています。』とあり、キリストが天地創造の際にすでに先在していたということが書かれています。

また、このことは1世紀の末に書かれたと考えられる『ヨハネによる福音書』では、古代ギリシャ哲学(特にスコラ哲学)の影響を受け、世界万物を支配する根本的原理とされる「ロゴス」(聖書では「^{ことば}言」と訳されます)と同一視されています。「^{ことば}言」を、「先在のキリスト」に置き換えて読んでみてください。

1 ^{ことば}初めに^{ことば}言があった。^{ことば}言は神と共にあった。^{ことば}言は神であった。2 この^{ことば}言は、初めは神と共にあった。3 万物は^{ことば}言によって^な成った。(中略)

^{ことば}14 ^{ことば}言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。(『ヨハネ』1章)

神学では、先在のキリストが人間になることを「^{じゆにく}受肉」と呼びます。キリストは「神が受肉した存在」ということになります。

キリスト教にまだ馴染みのないみなさまには、上記の『新共同訳 聖書』の『ヨハネ』を読むと、「あたまがゴチャゴチャしちゃうよ」なんて感じた方も、少なからずいらっしゃるかと思います。そこで同じ箇所「あの人」の訳です。どうぞお読みください。

1 初めにあったのは神さまの思いだった。思いは神さまの胸にあった。その思いこそ神さまそのもの。2 初めの初めに神さまの胸のうちにあったもの。3 神さまの思いが凝^こってあらゆる物が生まれ、それなしに生まれた物は一つもない。(中略)

^{ことば}14 神さまの思いがこうして人の体をまとって、われらが間に住まいしなされた。われらはこの方の輝くようなお姿を見た。父さまからよこされた一人息子のこの方の優しく、親切で、嘘偽りの影もない、輝くようなお姿を見た。

山浦玄嗣^{はるつぐ}『ガリラヤのイエシュー』

キリスト(イエス)は、「神」か「人」か ― 〈キリスト論〉論争

さてここで、イエスを「人となった神」と見なすと、それが父なる神の「唯一性」とどう関わることなのかという神学的な問題が起きました。つまり、「父なる神」以外に、「神の子」であるイエス

も「神」あるいは「神に等しいもの」だとすると、神さまが「二」になってしまいます。キリスト教はユダヤ教から、「神は唯一である」という神観念を受け継いでいますから、「唯一」ではなくなってしまいます。この問題は、キリスト・イエスが「神」なのか、「人」なのかという問題につながります。これを詳しくご説明しますと、2、3回連載をしなければなりませんので、山我哲雄氏と岩島忠彦氏(上智大学神学部教授)の著書から要約します。(興味のある方は文末の参考文献をお読みください。)

2世紀には次のような諸説がありました。

イエスは本来、単なる「人」だったとして、ヨハネによって洗礼を受けた際に(『マタイ』3-13~17、『マルコ』1-9~11、『ルカ』3-21~22参照)、「神の養子」とされたのであり、いわば後天的に神の子とされたという「キリスト養子説」。この説はイエスの「神性」、神としての性格を否定しています(ヨルダン地方のユダヤ人キリスト教であるエピオン派など)。

イエスが人間の姿をとって現われたように見えたのは、「仮象」(感覺的現象。客観的实在性を欠いた単なる主観的表象。仮の形、偽りの姿)に過ぎないとし、イエスの「人性」、人としての性格を否定する「キリスト仮現説」。霊的なものを重んじ、物質的なものを価値の低いものと見なす傾向をもつギリシャ哲学の影響下にあるヘレニズム文化圏で広がった考え方です(グノーシス派やマルキオン派など)。

キリストの神性は認めるが、神・神の子・聖霊は、同一の神の歴史におけるさまざまな現れ方(様態)であって、キリストと神は同一のかたであるという「キリスト様態説」。

上記のような神の子の理解に対して、「^{きょうふ}教父」と呼ばれた教会の教えを受け継ぐ指導者や神学者たちは、それらを「異端」としました。

キリスト教がローマ帝国に迫害されていた期間は、このような神学的問題はあまり大きな論争になることはありませんでした。しかし、313年にコンスタンティヌス1世によりキリスト教徒の信教の自由が認められ(「ミラノ勅令」)、キリスト教が保護されるようになると、公の場で宣教や議論ができるようになりました。そして上記のような問題が再燃し、大きな神学論争が起きました。

アレキサンドリアの司祭アリウス(アイレオス)は、キリストは神にもっとも類似し、人間よりはるかに優れた最高の被造物であるが、創造者としての神とは異なる — としてイエスの神性を否定し、神の唯一性を守ろうとしました。これに反論したのが神学者アタナシウスで、キリストの神性を認め、神とキリストは「その本質において同一」であると主張しました。

ニカイア公会議

この論争はエスカレートし、教会全体が分裂しかねない状況になりました。キリスト教を利用してローマ帝国の再統一を強化しようと考えていたコンスタンティヌス帝は325年、当時の代表的な神学者や高位聖職者を小アジア西部のニカイアに集め、この問題を決着させるために「ニカイア公会議」を開きました。この会議では、アタナシウスの主張が「正統」と認められました。

コンスタンティノーブル公会議

次に、「聖霊」と神との関係が問題になりました。復活したイエスは、すべての民に『父と子と聖霊の名によって洗礼を授け』るよう弟子たちに命じました(『マタイ』28-19)。人間の救済に父と子と聖霊が働きかけているという認識が示されています。

聖霊とは、神の「在り方」のひとつなのか、それとも、神自身とは「異なる存在」なのか(たとえば「天使」のような)が論争的になりました。

381年当時の皇帝テオドシウスは、第2回の公会議(コンスタンティノーブル公会議)を招集しました。その結果、「聖霊」とは「超越的な神が世界に内在してはたらくあり方」とであると理解され、その神性が認められました。

これによって「父」なる神、「子」なるキリスト、聖霊が、〈唯一の神の、三つの異なるあり方〉とする「三位一体論」の基礎が据えられました。

その後、アウグスティヌスなどの神学者によって理論化・体系化されて、現在に至るまでローマ・カトリック教会、東方正教会、プロテスタント教会など主流派教会の根本教義になっています。

山浦先生の「三位一体論」解釈

「ああ、もうわからなくなってきた…」と戸惑う方。「どっちだって、何だっていいよ、もう！」とお手上げの方。「そんなこと、そんなに大事なの？ それを理解できないと信仰をもてないの？」と疑問をもった方。ごもつともです。

とてもわかりづらいというか、神秘的な理論ですよ。そこで、山浦^{はるつぐ}玄嗣先生にわかりやすく説明してもらいましょう。

『水(H₂O)が本質は何も変わらないのに、その在り方に固相(氷)と液相(水)と気相(蒸気)という三つがあるように、神さまもそのお姿に三つのお顔がおありなされるのです』。

これからキリスト教を学ぼうとお考えのみなさまにとって、これ以上わかりやすい解説はなかりろうと思います。神さまの「三つのお顔」とは、すなわち「三つの存在様式」です。

日本では政治家が、「三位一体の改革」なんていうことがあります。元首相の小泉純一郎氏が地方分権と地方財政の改革案として、「補助金削減」「国から地方公共団体への税源移譲」「地方交付税の見直し」の三つを一体化して改革するといって「三位一体の改革」という言い方をしました。しかし三つの改革案はそれぞれ「別もの」であり、それらを「一緒にやっていく」というだけです。キリスト教の三位一体とはまったく関係ありません。勝手に使わないでほしいものです。

ここでもっと山浦先生の「三位一体論」について詳しく書きたいのですが、1回分のページ数に到達してしまいました。次回までお待ちください。

- 【引用・参考にした書籍】
- ・山我哲雄 『キリスト教入門』
 - ・新共同訳『聖書』
 - ・佐藤 優 『神学の思考』(平凡社、2015)
 - ・森 一弘 『キリスト教入門 Q&A』
 - ・山浦玄嗣 『イチジクの木の下で(上・下巻)』、『ガリラヤのイエシュー』
 - ・新要理書編纂特別委員会 編集、カトリック司教協議会 監修『カトリック教会の教え』(カトリック中央協議会、2003)
 - ・『岩波 キリスト教辞典』
 - ・岩下壯一 『カトリックの信仰』(ちくま学芸文庫、2015)
 - ・ミルチア・エリアーデ 『世界宗教史 II ゴータマ・ブッダからキリスト教の興隆まで』(筑摩書房、1998)